『室町文学解記』

松本 寧 至

立正大学教授白井忠功氏は、本学（辻学舎大学）御出身で、さくらに進んで立正大学の大学院で学問をおさめられた方である。学会で立正大学の大講堂を拝観し、種々お世話になった。

あるお日ごろ、気楽なよい先生で、つづいてもういちどどうでしょうかと打診してみたが、今度はことわられた。あたらしいよいが、そうやすっと言いたいときにない。これは学問と同様である。有難いことだ。

さて、先に『室町文学解記』なる好書を刊行された。すでに氏には『中世の紀行文学』、『歌人正歌研究序説』、『中世紀紀行文論』など、連歌師、紀行などについての著作は多い。日記文学と紀行文学とは、元来不相分の関係にあるので、私自身にはいつも氏の研究注目し、導かれてきた。ついでにいうと、『室町文学解記』というふうにジャンル分けをするとき、鎌倉時代以降の『紀行文学』というのに、内容は旅の記である。『佐々日記』を紀行文としていた時代すらある。

それにしても、この『室町文学解記』は、旅の記としての『日記』といえば、いつもの旅だ。なにや今日、昨日、今日、明日、と今の考えでは反対ではないかと思われるほど、 váきものことがある。それこそが鎌倉時代以降の『紀行文学』である。その中で、正歌の伝記の要を得た紹介がある。これは某事実の解釈であるせいかも知れない。『草根和歌集』の俳句が、その世界は、歌詞を充分理解した上で、抒情、抒情、抒情、抒情が展開されている。と同時に、針通の『釈迦』の伝承がある。鎌倉は、真説の声であったとする。往事と現在の歌についても、読者の感興をそそる。『往事如夢』の、
さて、にこをめはむくにかくに前の夢のむずはほれつ
おへねむかしをぬれはみる夢の水にさめたかのうつを
など『和漢朗詠集』往事夢楽都似夢旧遊夏落半帰泉』をおして作
したものをと指摘する。また『老後初恋』なども、
手にとってたてもゆらぐ玉ははき鹿つもりにし年もはっかし
など老年の初恋はなかなか成就出来ないもかしき。詠かしさをよ
なでいるとしている。思わずこれは説話があって、『俊頼口伝集』な
どの志賀寂人と京極信忍との恋が念頭にあったものである。
この歌は元来はさらにさかのぼって大伴家持の『万葉集』卷二十に
よる転用。すなわち初春のはねの今日の玉ははき手にとらおら
にゆらぐ玉の緒である。余計なことながら加えしておく。『物纇』
『源平盛衰記』『太平記』にも見える。

『老恋年』

第七に一けるのはれの身をもてあればある世のなにをれへ
もや老駱七十歳、恬淡として何の悩みがあろうかという悟りの
種地であろうと著者はいう。

第二章は連歌・連歌師放であるが、まず応仁の乱によって流亡し
た心敬・宗祇などを抱いている。心敬は冷泉の正徳に師事し、絶
大な影響をうけていたことは周知だ。心敬は叡山で修行し、権大
僧都にもなった。『みずたみ心経』『老のくりこと』などの連歌論は有
名である。心敬のもとめたもののは心の飽で、人生の無常を思い、飽
の美を追求する作家の言語感覚が、ひえ、やせ、寂びに結晶する。

自然仏教語が多く用られるが、修行をつけ、真実に生きた心敬の求
めたものは、中世美の到達点でもあったろう。『竹林抄』の、
心さへもめぐも花の隠れて
の付句が、心敬最後の句とされるが、氏はここに西行を連想させる
かったのが、古典にも精進し、東常縁より『古今伝授』をうけたこと
知られ、『伊勢物語』『源氏物語』『古今著聞』などに出されているとし
るものがあり、詩人の魂が見事に表現されているとは首肯される
人だ。古典にも精進し、東常縁より『古今伝授』をうけたことは
知られ、『伊勢物語』『源氏物語』『古今著聞』などに出されているとし
多々荘Ế在る夢を夢にした宗祇は、ゆえにうごく室町時代の文化人の象徴でもあっ
たとする。東国での宗教は、ゆえにうごく室町時代の文化人の象徴でもあっ
不滅だ続ていが、すでに終結にむかっていた。師の心敬も文明七年
に死んだ。師と弟子の関係は、交わされるかのように新たに花びらいたのが宗
学だと著者はいっているようである。換言すれば無常のなか、常住
をみるのが漂泊の詩人である。ついて、連歌師と鎌倉、連歌小史
などが右をそれぞれ Kostenめる。

第三章は室町時代文言文学の詳細な解説である。この時代は旅が
多く従って紀行文が多く残された。元興の研究者の説をよくまとめて
紹介していて便利である。注目すべきは村分けて『房山氏縁記
行』を抜いていることである。氏族一人も歴史的に興味ある対象だ
が、ここでは著名な『紀行』ののみを抜く。文観二流に秀で歌才に恵

—110—
文は短文であるが、文章は優雅、和歌も平易、素直で秀逸。当時の文風の中では傑作の一つとして著者は称賛しない。

『信楽日記』における『東洋文筆』は単なる宗教者の心情にとどまるものではなく、文人が創作の情熱を揺さぶる言葉であったと結論する。

縁の作者は『室町時代の文学を中心として、断片的であるが、云南の薬用を傾けて便利な『室町文学者事典』』もしくは『室町時代文学事典』など、作ってもらう。

新典社研究叢書一五一
平成一〇年六月刊、三八ページ、九八〇ページ

——111——